万年筆の旅

吉村昭
記念文学館
準備室ニュース

vol.5
平成27年10月30日発行
登録番号(27)0053号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
複合施設準備室
〒116-8501
東京都荒川区荒川2-2-3
TEL.03-3802-4976
題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏

戦艦武蔵の模型をご寄贈いただきました

本年は、戦後70年の年にあたり、戦争を振り返る報道などが数多くなされています。3月には、戦艦武蔵がフィリピンのシブヤン海沖で発見されたとの報道がなされ、吉村昭氏の作品「戦艦武蔵」に注目が集まりました。その後、吉村氏の講演録を収めたCDや、戦史小説などをまとめた全集なども発売され、氏の功績に対する評価が、益々高まっていることが感じられます。

そのような中、本年8月18日に、区内の模型メーカーである㈱童友社様（荒川区荒川4-27-21）から、戦艦武蔵の大型の模型が寄贈されました。

戦艦武蔵 模型
1/250 スケール
W1055mm×D155mm×H225mm

この製作には5か月を費やされたそうで、㈱童友社様には、この場をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

寄贈いただいた模型は、平成29年春に開設予定の吉村昭記念文学館の展示の一部として活用したいと考えています。

「高熱隧道」の直筆原稿などが展示されています

『高熱隧道』
（新潮社＜文庫＞、
平成22年改版）

本年3月に北陸新幹線が開業し、北陸方面へのアクセスが便利になりました。

新幹線の新駅、黒部宇奈月温泉駅から富山地方鉄道を乗り継いだ先にある、日本一深いV字峡谷を走る黒部峡谷鉄道の終点、欅平駅（富山県黒部市）では、昨年11月に「黒部川電源開発歴史探訪コーナー」が開設されました。そしてその一角には、黒部川第三発電所の建設当時の様子を克明に描いた吉村氏の作品「高熱隧道」の直筆原稿（複製）や、吉村氏愛用の万年筆が展示されています。

観光客の中には、この作品を読み、訪問される方も多いそうです。

吉村氏の作品が、今もなお、全国各地に息づいていることをあらためて感じさせられました。

この秋に、北陸方面にお出掛けの際には、こちらにも足を向けてみてはいかがでしょうか。

※本年は、11月30日まで営業予定

欅平駅の「黒部川電源開発歴史探訪コーナー」

文学館友の会について

本年3月7日に設立しました「吉村昭記念文学館友の会」は、9月末日までに、300名を超える方々から入会のお申込みをいただきました。ご入会いただいた皆様には、会員証と会員バッジをお渡ししています。

会員証

会員バッジ

また、賛助会員としてご寄附をいただいた方には、申込口数に応じて、ポストカードやブックカバーを贈呈しています。

会員は随時募集しています。

※申込方法その他、友の会の詳細は、荒川区ホームページをご覧ください。
(http://www.city.arakawa.tokyo.jp/arapura/yuinomoriarakawa/tenji-event/tomonokai.html)

施設開設プレイベント

吉村司氏講演会「父・吉村昭」

日時：平成27年8月16日（日）
14時30分～16時
場所：ムーブ町屋　ムーブホール
挨拶：西川太一郎（荒川区長）
斎藤　泰紀（荒川区議会議長）

吉村昭氏の御子息である吉村司氏を講師にお招きし、講演会を開催しました。司氏は、上智大学卒業後、昭和59年（1984）、ソニー株式会社に入社し、6つの研究所を経て、現在はソニーコンピュータサイエンス研究所チーフプロデューサーとしてご活躍されています。

講演を行う吉村司氏

講演会では、御家族ならではの視点から、作家 吉村昭氏の父親像や息子から見た吉村文学の魅力など、貴重なお話をご披露していただきました。本稿ではその一部をご紹介します。

墓に対するこだわり

私が物心ついたときから、父は折に触れ、墓の話をしていました。「とにかく俺は死ぬから、墓参りに来なければならない」と。子どもというのは、親は死なないものと思っているので、子どもの頃から父の死をつきつけられるようなもので、嫌な気持ちでした。

父は中学生時代（現開成学園）に戦争を体験し、大学生のときに当時ほとんど成功例がなかった肺結核の胸郭手術を受けました。こうした経験から、死というものは必ず身近にあるもので、時間は有限であると思うようになったと思います。父の作品に死をテーマにしたものが多いのも、この経験が影響していると思います。そして、これが墓へのこだわりとなって現れたんだと思います。

父は、一家団欒がある家や家族愛があるような家庭は、墓参りをするものだと思っていた節がありました。

新潟県湯沢町にある吉村昭の墓。墓石には吉村昭直筆の「悠遠」が刻印されている。

私にとっては墓参りよりも、父がいつもいた書斎や父の作品を読むことで、父を思い出し、父に触れることができると感じています。

親孝行を考える

私は、親孝行をしておけば良かったと思った記憶がありません。父は100％全時間を使って好きな仕事をしていました。それを慰労したり、ご苦労さまというのも何か変な感じがします。観光旅行に連れて行くというのも、父の小説を書く時間を奪うことになるんです。ですので、もっと親孝行をしておけば良かったというのはないんです。

ただ、父はどんな評論家や出版社の方々に作品を褒められるよりも、私や妹に褒められるのが一番嬉しかったと思います。作品を褒めると、だらしがないほどにものすごく喜んでいました。悔いがあるとしたら、もっと作品を読んで、「良かった」「素晴らしかった」と言ってあげれば良かった思います。

逆に、父をがっかりさせたこともありました。私は「星への旅」や「少女架刑」など、初期の純文学作品が好きで、文芸技術を使った光景描写に大変しびれていました。映像が見える文芸ってこれだなと思っていました。ところが、「戦艦武蔵」という今までと全く違った作品がでてきたときは、非常にがっかりしました。「戦艦武蔵」は史実ですから、事実をそのまま書いているだけで、何も創造していないじゃないかと思い、それを伝えました。父はヤケ酒を喰らったと思います（笑）。今では、吉村昭という作家が、小説という手法を使って史実を書くと、どんな歴史資料よりも歴史のエッセンスが伝わるのではないかと思っています。

父は、史実を書くことによってあの戦争はなんだったのかと理解を深めていたのではないかと思います。そして、「戦艦武蔵」という記録文学が大ベストセラーとなったので、家庭を養うには、これまで書いた純文学ではなく、記録文学でやっていこうと思ったんだと思います。

父は、一家の主だという気持ちが非常に強かったと思います。もちろん、自分を芸術家だと思っていたと思いますが、家庭を顧みず、好きなことだけをしてい

ればいい、というタイプではありませんでした。一家を養っていくために、ベストセラーとなった記録文学という道を選んだんだと思っています。

父と私と酒

父はお酒が強かったですし、よく編集者と酒を飲んで、作品の構想を練っていました。私が中、高生くらいのときだったと思いますが、ある日、「もし酒を飲むなら最初は俺と飲め」と言われました。父は、一番最初にどういう酒の飲み方をしたかで、その後の飲み方が全て決まると思っていました。

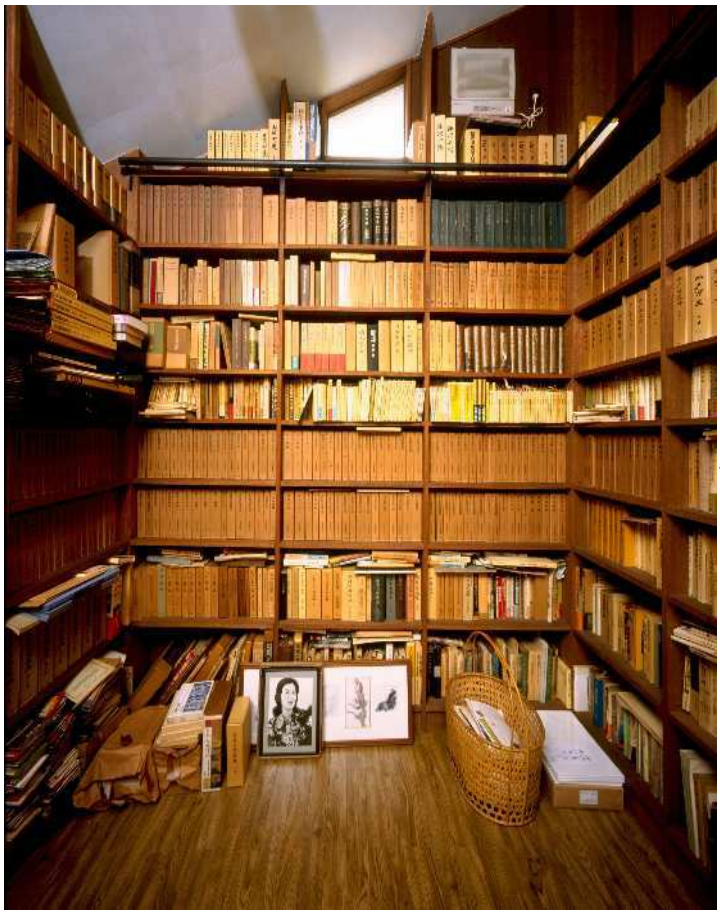
私も毎日酒を飲んでいますが、父と最初に酒を酌み交わしたので、酒癖も悪くなく（笑）、父が編集者の方とやっていたように、私も会社の仲間とディスカッションしながら飲んでいます。

父の書斎

父は亡くなるぎりぎりまで、書斎で仕事をしていました。書斎という空間は、父の頭脳の一部でした。平成19年の3月29日に、私はここで大泣きをしたんです。この日は、荒川区が書斎の書類を引き取りに来る前日でした。この状態で保管されていればーもう生きていないわけですがー父がまたあそこの位置に座れば、何のタイムラグもなく、すぐさま作品を書くことができます。それが、全部書類を持って行かれると、脳として機能してきた書斎も完全停止、命を止められることになります。父の名残がなくなってしまうという以上に、父は確かに亡くなったのだ、という実感がこみ上げてきて、泣けて泣けてしょうがなかったんです。

逆に、ここから全ての書類がなくなってからは、何の未練もなくなりました。脳の一部だったときは、こういう形で書いていたんだろうなと思って、名残を感じることができたんですが、書類がなくなった後のこの建物に私自身、執着、こだわりがなくなってしまいました。

書斎の内部。吉村昭記念文学館では書斎の再現展示を予定。



「手で書く」ということ

父はよく、「小説は頭で書くことじゃない、手で書くんだ」と言っていました。小説、随筆、文芸というのはイマジネーションで、非常に高度な頭脳を使わなければ作品を書けないわけですが、良いアイディアが出たからじゃあ書こう、というのではない。とにかく自分の手を強引に原稿用紙に持っていって、手に書かせる。そうすると、良いアイディアやこういうことを書こうということが出てくると言っていました。

私は今ソニーという会社にいて、いろいろなプロジェクトの中で商品開発をやっています。まずやってみる、とにかく行動してみる、ちょっと作ってみるんです。手を動かしているうちに、こういう構造にしてみようかな、というふうに新規開発が生まれるわけなんです。

ということで、私の心の中には、父の「手で書く」というのがあります。体の赴くまま、とにかくなんかやってみる、ということなんじゃないかなと思います。

聴講された方々からは、「吉村昭氏を父という姿として御息子が語られるということで興味深く聞きました（70代・女性）」「昭氏は作品も素晴らしかったが、その人となりが大変好ましかったので今日のお話でもその感がますます深まったことをうれしく思います（80歳以上・男性）」などの感想をいただきました。

著作紹介
第３回

『ポーツマスの旗』

『ポーツマスの旗』
（新潮社＜単行本＞、昭和 54 年）

テーブルをはさんで互に握手を交し、小村は中央の椅子に坐り、右手に高平副全権と佐藤、左手に安達、落合が坐った。ウイッテの左にはローゼン副全権、コロストヴェッツ、右にナボコフ、プランソンが着席した。小村の前には、十二条の講和条件を記した英仏文二通の書類の入った大きな封筒が紫色の風呂敷につつまれて置かれた。

初めに全権委任状が互に提示され、確認し合い、いよいよ本会議が開かれることになった。

（『ポーツマスの旗』新潮社、昭和54年）

史実の真相に迫る　明治37年（１９０４）に始まった日露戦争。勝利を治めながらも国力が尽きていた日本は、翌38年９月、戦争継続を回避するため、アメリカのポーツマスで講和条約を締結しました。そのような実情を知らずに、勝利国としての期待を寄せた国民は、ロシア側に譲歩した講和条件を激しく非難。条約締結の日には、講和反対を唱える国民大会が、日比谷焼打ち事件に発展します。そして、全権委員の外相、小村寿太郎は、屈辱外交を行ったとの批判を一身に浴びました。

本書は、これらの史実に迫り、講和会議をめぐる真相を描き出しています。

独自の着眼点　吉村は、『海の史劇』（新潮社、昭和47年〈１９７２〉）に関する資料検証から、屈辱外交という定説は誤りであり「妥当な条約成立」であったと知ります。同時に「戦争と民衆との係り合いの異様さ」に関心をもち、講和成立が「明治維新と太平洋戦争をむすぶ歴史の分水嶺」であることに着目。「講和会議を書く」構想のもと（「あとがき」『ポーツマスの旗』新潮社、昭和54年）本作を書き下ろし、昭和54年に発表しました。小村の実像と外交手腕を明らかにし、日本政府の方針や、ロシア全権ウイッテとの論議、アメリカ大統領ルーズベルトと諸外国の動向を活写。緊迫した講和会議の実態と、世論にみる民衆の姿を浮き彫りにしています。

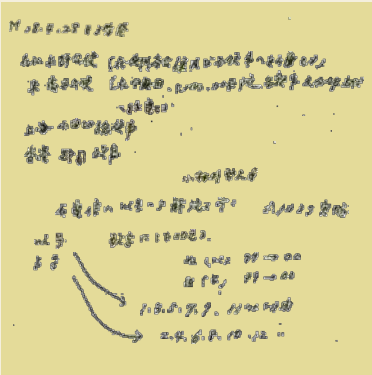
調査、取材と実感　執筆のため、吉村は、ロシア側資料を含む参考資料を収集し徹底調査。さらに、未発表資料を入手するなど関係者への取材を行います。小村の故郷である宮崎県日南市飫肥（おび）も訪れました。その過程で知った小村の書生、桝本卯平による『自然の人 小村寿太郎』（洛陽堂、大正３年〈１９１４〉）を調査。知られざる小村の私的な側面を掘り下げるとともに、外交官としての信念を貫いた帰国後の姿まで追究し、陰影に富む圧倒的な個性を生み出しました。

一方で、講和会議が行われた頃の風情が残るポーツマス市を訪問します。風土を体感し、会議場や関係者を取材。保存されていた小村が使用した椅子に接し、歴史を継承するあり方に感慨を深めます。これらの実感は、蚊の音に至るまでの情景描写や、臨場感あふれる会議の再現を可能にしました。

日本側の組織力　作中、「新聞操従」など外交術を駆使するロシア側。対して日本側は、講和成立のため着実に任務を果たし、一致協力した動きをみせます。中でも、諜報網が張られた各地の公使は、情報収集や世論への働きかけに奔走。男爵 金子堅太郎は、ルーズベルト大統領との親交を活かし、日本へのアメリカ世論を好転させ、日本側と大統領の仲介に尽力しました。

それらは、暗号電文を含む電報を介し、小村の発言に集約され、講和成立へと結実します。講和条件の妥結もまた、決裂寸前に届いた訓電が活きたものでした。電報をめぐる緻密な筆致は、刻まれる時間と、交錯する思惑を際立たせます。

吉村が「小村寿太郎ノート」と付した一冊のノートには、明治38年、小村が、以号、呂号の暗号表を改定した場面に該当する記述が見られます。【写真】



【写真】「小村寿太郎ノート」（吉村昭コレクション）
以号、呂号の暗号表に関する記述

「誠実さ」を貫く　小村は、ロシア側の意図を洞察する一方、歴史が浅い日本の外交を冷徹に分析。「誠実さ」に基づく基本方針を見出し、毅然と貫きます。

吉村は、日本側は「誠実さという細い一本の棒で行く。自分が口にしたことは絶対に守る」ことで、「つかみどころのないロシアの態度」を引き込むことにしたと述べています（「小村寿太郎「命がけの胆力」と「したたかな外交技術」」『ＳＡＰＩＯ』第９巻第13号、小学館、平成元年〈１９９９〉）。

そして、ウイッテと小村の白熱した応酬を「言葉の真剣」で渡り合うようだと語りました（九州・沖縄サミット宮崎外相会合記念シンポジウム・記念講演「外交官　小村寿太郎の活躍と苦悩」『宮崎政策研究第31号』宮崎県サミット協力推進協議会、平成12年）。会議や電文―その言葉の一つ一つが迫真に満ちています。

旗が語るもの　冒頭、小村は、民衆が振る国旗と歓声に見送られ、ポーツマスへ旅立ちました。全編を通して、状況により変化する旗の在り様は、民衆と戦争の関わりを物語ります。

非難を覚悟で国益を追求し、私欲を求めず、外交に命を賭した小村。平成５年には、故郷の宮崎県日南市に国際交流センター小村記念館が開館しました。

講和条約成立から１１０年目の本年。歴史の事実に新たな光を当てた本書は、多くの示唆を与え続けています。

〈文学館準備担当学芸員　深見美希〉

「吉村昭コレクション」とは、夫人である津村節子氏から荒川区にご寄託いただいた吉村昭氏旧蔵資料のことです。